

身延山諸堂建立考

林 是 晋

はじめに

宗祖日蓮聖人による三間四面の草庵創建以来、身延山には多くの堂宇が建立されきたった。そしてそれら身延山諸堂建立の歴史は、幾多の変遷を経たのち、日蓮聖人七百遠忌報恩事業のいわば象徴たる、現に槌音も高く工事進行中である、身延山大本堂建立の今日に至るのである。

この身延山諸堂建立の歴史、即ち七百余年にわたる諸建造物の変遷推移の事跡、そしてそれに要した歴代法主をはじめとする多くの人々の苦心經營、あるいは外護の檀越の努力のあとを辿り、更にはまた諸堂宇の性格、そのはたしてきた役割等を考察することは、身延の「故（ふる）きを温（たず）ね、新しきを知る」上で、ぜひともなされなくてはならないことの一つであろう。

事実、大正十二年（一九二三）に身延山開闢六百五十年を記念して編纂、出版された『身延山史』も、これが記述に多大の紙数を割いているのである。これに拠りながらも、未だそこに明らかにされていない種々の問題について、今後自分の課題としていくつもりであるが、ここではその概略を述べるにとどまる。

建物を建てる際に、無視できないのは、その立地条件と、自然環境である。これらは建物の形状・規模・構造等に影響を与えずにはおかない。そこで地形・地質・気候等の、身延のおかれた自然環境について簡単に触れておこう。身延山の位置する身延町は、平地が少なく、その大部分はけわしい山岳地帯によって占められ、多くの深い谷が刻まれている。

身延山はこの身延町の西北部に標高一、一四八メートルをもって聳えている。その南には一、〇三六メートルの鷹取山、西には一九八二メートルの七面山等の高く、そしてふところの深い山々が連なって、靈地としての幽邃を保っている。

身延山と鷹取山の水を集め、両山の間を縫って身延川が流れている。身延川はやがて波木井川となり、波木井川は東に流れて富士川に流れ込んでいる。富士川は身延山の東側をほぼ南北に流れる大河で、川幅が広く、波木井川の合流点よりさらに上流の、早川との合流地点では実に千メートルにも及ぶ川幅をもっている。こうした山河のたたずまいを、日蓮聖人は

此山の為體、日本国の中には七道あり。七道の内東海道十五箇国。其内に甲州飯野御牧三箇郷之内、波木井と申。此郷之内、戊亥の方に入て二十余里の深山あり。北は身延山、南は鷹取山、西は七面山、東は天子山也。板を四枚つい立たるが如し。此外を回て四の河あり。從北南へ富士河、自西東へ早河、此は後也。前に西より東へ波木井河中に一の滝あり。身延河と名けたり。中天竺之鷲峰山を此処に移せる歎。將又漢土の天台山の来る歎

と覚ゆ。此四山四河之中に、手の広さ程の平かなる処あり。爰に庵室を結ムスべと、述べておられる。

聖人が「波木井河の中に一の滝あり」と表現された身延川は、広い平地をもたず、わずかに川の東側に河岸段丘の発達があるばかりで、きわめてせまい谷を作っている。このわずかに広がる河岸段丘の上に現今の身延門前町が展開し、身延参詣の善男善女を送り迎えしているのである。

身延山を形成している地層は、およそ一千万年ほど昔(新第三紀中新世—鮮新世)に海の中に沈積したもので、と考えられている。したがって「山」としての身延山は数百万年前に成ったということになるか。

身延の山には多くの断層が発達し、いたるところに山くづれの地形をみせている。たとえば身延山頂にみられる、いわゆる「ガレ」と称されるものは、その典型であろう。

また身延山は糸魚川—静岡構造線の東側に接近している。構造線とは断層線の一つで、その断層を境として両側の地質構造がまったく異なる場合に構造線といわれる。この糸魚川—静岡構造線を西線とし、関東山地を東線とする、本州の中央部を南北に横断する地帯が大地溝帯(フォッサマグナ)といわれ、日本列島を地質上より東北日本と西南日本に分ける、日本の最も重要な大構造の一つである。

身延は雨の多いところでもある。それは太平洋沿岸から富士川ぞいに湿った気流がのぼってきて、身延や鷹取などの山地にあたって上昇し、冷えて多量の雨をもたらすからと考えられる。この湿気の多さが周知のように日蓮聖人の健康を損なった一因とみられてもいるし、当然建物にも悪い影響を及ぼしてきたであろうことが十分考えられる。

このような山がちな地形、狭い平地、強くない地盤、そして多い湿気等の身延のおかれた地質的条件や気候風土は

この地が残念ながら建築にはあまり適したところではない、と言わざるをえないのである。したがって身延山の諸堂を建立、整備するとき、その建築・施工にあたっては多大な苦心が払われなければならない。

それではこのような環境下にあつて、具体的に身延の諸堂宇は如何に建立・維持されてきたたのであろうか。技術的な問題も含めて、今後考えていきたい。

しかし反面では、それがために土壌の空気や水の流通が良好で、とりわけスギやヒノキなどの成育に適し、非常に緑にめぐまれた自然環境をつくりあげて身延山を宗教的景観の中に置くと共に、良い建築資材を提供することも可能にしている。その中でも代表的なものは樹令二百年から三百年とみられている「千本杉」である。この杉林は県の天然記念物に指定されていることもあつて、今後も伐採されて実際の使用に供されることはないであろう。「千本杉」とは言っても本数が千本あるわけではなく、約二百六十本ぐらいのものであるが、樹木成長の極致をみせ、単位面積あたりの材積石高数では日本一といわれる。

この「千本杉」も含めて、山内に植林されている杉などのほとんどは、長い間にわたって身延の山を護ってきた人々の丹精によるものである。既に時間の流れの中に埋没してしまったこれらの人々の善行・苦行の跡を可能なかぎり辿ってみることも必要であろう。

身延における山林は、諸堂を整備するときのその有力な用材提供候補地であると共に、身延山を日蓮聖人の靈山たらしめている重要な景観的要素でもある。現在身延文庫にはこの山林における植林のようすを物語るものや、あるいは伐木などに関する諸手形等が多数蔵されていて、歴代の身延山当局が山林を護持するために払ってきた多大な努力の一端を垣間見せてくれている。今後これらを整理すると共に、関連資料を広く求めて、身延山林史上の問題につい

でも明らかにしていきたいと思つてゐる。

二

さて、身延・鷹取そして七面等の諸山と、富士川・早川・波木井川等の諸川に囲まれ、身延川の清流に臨んだ「手の広さ程の平かなる処」に、宗祖日蓮聖人が「き(木)をうちきりて、かりそめにあじち(庵室)をつく」⁽⁴⁾られたのは、今を去る七百余年の昔、文永十一年(一二七四)六月十七日のことであつた。この時をもつて身延山久遠寺の開創とするが、それは「十二のはしら(柱)」を周囲にもつ建物、即ち三間四面の大きさであり、建つて四年もすると「はしら(柱)四方にかふべ(頭)をな(投)げ、四方のかべは一そ(所)にたう(倒)れ」⁽⁵⁾るような、そまつな草庵であつた。

しかし、今、久遠寺の主要伽藍はこの、日蓮聖人が初めて草庵を構えられた地にはない。それは身延中興の十一世行学日朝がこの西谷の草庵の地の狭いことと、それから恐らくは地盤が弱く、かつ身延川に近いという危険をおもふはかつて久遠寺の移転拡張事業を敢行したからである。これには当然のことながらかなりの反対意見があつたことが想像される。後述する日朝の弟子日意の『身延山伽藍記』において、既に五世日台が久遠寺の主要伽藍が現今の地に移される前兆の夢を見ているとして、これを紹介していることは、日朝側が移転事業を正当化するためにとつた対策の一つではなかつたらうか。この移転事業は文明七年(一四七五)頃ほぼ終つたと見られている。⁽⁷⁾

その後の経過は日朝の判断が正しかつたことを示している。即ち、移転後わずか二十数年にして、日朝晩年の明応七年(一四九八)八月、甲州一帯は大地震にみまわれた。⁽⁸⁾日朝の弟子である村松海長寺九世十如日海の記録によれば

身延山諸堂建立考（林）

その際「身延山事大聖人御草創の諸堂地悉損滅河原に成り早んぬ」と、日蓮聖人西谷御草創の地が大地震のために河原になってしまったことが記されているのである。まったく紙一重の差で久遠寺は救われたのであった。西谷御草庵の地は昭和の現代になってさえも台風による水害によって多大の被害をうけている⁽⁹⁾。

この大地震の後、祖廟域は恐らく多少の治水工事が施されたのち、身延住僧や支院あるいは地域住民の共同墓地となっていた。そしてさらに宗祖棲神の地に対する渴仰追慕の念にもとづいて諸国の人々の埋骨の地としても次第に膨張発展し、大小の墓石が建てられていったのであった。こうした状況に対して三十三世遠沾日亨は「此処は宗祖当山最初建立十間四面の堂地也。九箇年説誦説法書写著述の靈地也。然るに往古より真俗の葬送場と為す山地狭小別に広地無き故か。仰ぎ願はくば後代の貫主 此処は清淨の靈地として四方の境を立て葬場は別にこれを設くべし。時に凡人の骨をもって此所に収むるは汚穢不淨也。日亨代にこれを禁じ納骨堂に収む。永代此式を破るべからず⁽¹¹⁾」と、祖廟域が往古より真俗の葬場になっていることを指摘して、後代の貫首（法主）に墓所を別に設け、祖廟域を浄化するよう遺誡している。このことはやがて近代に至って漸く実現していくのであった⁽¹²⁾。

三

ここで身延山の諸堂建立に関する資料を一瞥しておこう。まずこれを主題としたものとしては、先にも触れたように身延十二世円教日意の『身延山伽藍記』が挙げられる。日朝による移転事業完了直後の文明十年（一四七八）正月八日に著わされたものである。日蓮聖人の身延御入山以降、日朝の移転に至るまでの概略を述べたもので、前述のように五世日台が貞和二年（一三四六）に久遠寺の主要伽藍が現今の地に移される前兆の夢を見たことを紹介している。

短いもので煩を厭わず左に掲げることにする。原漢文体であるが私に訓み下した。猶、この『身延山伽藍記』は『本化別頭仏祖統紀』に収載されているものを引用した。『日蓮宗宗学章疏目錄』は「正本身延」にありとするが、身延文庫にはその所蔵が確認されない。

身延山伽藍記附台上
夢説 十二代円教日意

文永十一年甲戌 吾祖嘉遯す。波木井氏の請に応じて甲地に到り僅に小茅を結ぶ。浄界百余弓鷹取嶽の麓 猿鹿伍を為し 俗を去ること数里 誦誦唱題快く安穩なることを得たもう。桃李蹊を成して終に一会と為る。別に方六丈の仏殿を開き 扁して身延山久遠寺と呼ぶ。祝釐拈香して宗門の祖山と為す。六万恒沙相次で出るや世人に乏しからず。滅後如今二百余年濫觴の水湛え法界と為す也。檀越実長又内秘の人なり。預め後の興隆を識り 竊かに遠鑑を廻らし 四至地を増し 峯に阜に谿に河に周匝不測なること殆ど天下に甲たり。吾師朝公来って茲に主たり。是地隘狭にして衆毎にこれを苦しむ。師鼎建の力を振って今の地に移す。躬自ら山を鋤き谷を塞ぎ木を拽き石を搬び 殿堂楼廡子院孫舎に迄各地勢を抱き 各其の処を得 達巷交衢俗民も亦其の便を得たり。後に偶古経の外帙を見るに 烟煤敗墨の間 微く字形を見る。塵を掃い細かに閲すれば第五代鏡円台上の識文なり。其の文に曰く 貞和二年丙戌九月二十日の夜夢みらく 山僧偶隣村梅平に遊び 回顧すれば山巔に塔の九輪有り。これを下ること一平等地砥の如く 宏基鉅構殿堂楼閣鬱として盛なり。村居処処に崖に傍い流を抱く 農夫役を取る。夢裡に思念すらく 他日吾山嘉運時有り 輪奐是に至らん。夢醒めぬ。乃ち其の九輪の地に就いて八幡の社を築き 以てこれを誌すと云う。吾師能くこれを見畢て 敢て人に語らず。余竊かに命を稟けてこれを拜す。奇なるかな八幡の旧社今猶存す。謹んで惟るに高祖の遺訓に往往言う 身延山は真の靈山 事の常寂光土

なりと。然らば則ち三災にも焼けず 四劫にも遷されず 久遠劫来靈山一会儼然未散にして 実に本国土妙なるものなり。凡夫は識らず 悲しいかな それ台上は夢に託して理を説き、朝公は理に即して事相を際す。聖者の域 俯して信ずべきに足るものか。文明十年戊戌正月八日

以上がその全文である。

次に日朝の久遠寺移転事業以降、十八世紀初頭の三十三世日亨代に至るまでの諸堂建立の記録として、日亨の手になる『身延山久遠寺諸堂等建立記録』がある。残念ながら日亨自筆のものは現存しておらず、身延文庫には写本が日亨の部に架蔵されている。そしてこれは昭和四十五年日亨の二百五十遠忌を記念して、宮内庁図書寮蔵本を底本とし、身延文庫蔵本を対校したものが身延山より翻刻されている。¹⁴⁾

最後に、度々襲いきたった火災・地震等の災厄にもめげず、幾度か灰塵に帰した伽藍復興の足どりを、あるいは諸堂の修復の様子等を近代に至るまで書き継ぎ、先に出版された『身延山史』の基本的な史料ともなっている『身延山諸堂記』・『身延山再建諸堂記』・『身延山再々建諸堂記』と名付けられた三冊の記録がある。¹⁵⁾これは大変詳細なもので、今後もやはり身延の歴史を考えていく上での基本的な資料となっていくものである。いつの日にか機会をえてこれを翻刻し、このようなものを遺してくれた先師の労に報いたいと思っている。

四

以上挙げたこれら直接に諸堂建立に触れたもの以外にも、他のいろいろな関連資料から身延の諸堂建立に関することがらを知り、考えることが可能である。そのような例を一、二掲げてみよう。

三間四面の草庵において宗祖はしばらく生活されたが、やがてしだいに聖人を慕い、登山して修業する人々の数は増加していった。弘安元年には「人はなき時は四十人、ある時は六十人」⁽¹⁶⁾、翌二年には「今年一百よ人の人」⁽¹⁷⁾を教えらるに至っている。

三間四面の草庵の大きさは、当時の建築の間を一丈前後とみて、現今の六十畳敷くらいの規模のものともみられるが、⁽¹⁸⁾それにしてもこれほどの多人数が一所に生活できるほどのものではなかったのは明らかである。したがってその住居確保について二つの可能性が考えられる。草庵の拡張と、新たな他の場所での僧坊の造営とである。前者は弘安四年の十間四面の大坊造立まで待たなければならず、残るは後者である。

最初の草庵を本院とみた場合、新たな造営は支院の発祥となる。今も身延山内に連綿として存続する支院の起源は、このころまで遡りうると想像されるが、しかしそれを実証しうる確実な資料は見出すことができない。

更にこれは既に『日蓮教団全史』に指摘されていることがらであるが、宗祖入滅後、墓所のそばに「塔頭」と表記される寺が建てられ、門下の給仕奉仕のところが⁽¹⁹⁾となった。

そして富士門流の三位日順の『従開山伝日順法門』には「聖人御存生ノ間ハ御堂無シ、御滅後ニ聖人御房ヲ御堂ニ日興上人ノ御計造玉フ、御影ヲ造ラセ玉フ事モ日興上人ノ御建立也」⁽²⁰⁾とあって、日興が身延在山中に宗祖の住んでおられた房を御影堂に改め、聖人の御影を造ったことが知られている。

また中山三世日祐の『一期所修善根記録』によれば、身延三世日進代に「身延山久遠寺同影堂大聖人御塔頭塔頭板本尊」⁽²¹⁾が修理、造営された。特に康永元年（一三四二）四月八日の釈尊降誕の日に、御塔頭の柱立の結縁に登山した日祐は、その折「大聖人御舍利拜し奉る」⁽²²⁾と、宗祖の御真骨を拜しているところから、それまでは恐らく土中に埋葬

されていた宗祖御真骨が、新たに造られた御頭塔に安置されることになったものであろうと推察されている。⁽²³⁾

その後の宗祖御真骨は、日朝の手によって西谷の地から現今の山腹の地に移されて二重塔に祭られたと考えられ、⁽²⁴⁾ 天正十三年（一五八五）十七世日新の時に二間半八角の廟堂と拜殿をもつ奉安所が造られ、更に慶長年間（一六〇〇頃）お万の方によって三間半四方の御真骨宝蔵が営まれ、後に述べる文政年間の炎上には再度にわたって復興され、そして明治八年（一八七五）の大火後には現在の八角五間四方の御真骨堂の再建成就へと至るのである。

五

火災についても一言しておこう。それは營々として築いてきたものを一朝にして失わしめる不幸な災害である。身延では残念なことに江戸の中頃から明治にかけてしばしば火災にみまわれている。そして、その度に深い痛手を負ったのである。しかし身延の歴史は、身延を護持してきた人々がこれにめげることがなかったことを教えている。災害にあえばその度ごとに人々は緊張し、そして協力し、着実な復興の歩みを示したのである。その意味では諸堂建立と火災とは表裏一体をなしているといつてよからう。

延享四年（一七四七）に下之坊より出火して山内十一ヶ坊が焼失したのを身延火災の最初とする。

安永五年（一七七六）には七面山が焼失し、その際除歴唱師事件が惹起された。

文政四年（一八二一）には御廟八角堂が焼失し、更に三年後の同七年には祖師堂天井より出火して多数の堂宇を失ったのであった。

この時の延山炎上について、はるか長崎平戸の城主であった松浦静山は、その著『甲子夜話』の中で次のように述

べている。

身延山焼亡のことは、或人曰。その時本堂に彼の山徒寄合ひ居て、何か為たりしが（博奕ならん、など人云ける）、飯を食せんと暫く退し間に火発せり。人々返り来れる頃ははや猛炎近づくべからずして、祖師堂に火及んで、祖像も焚んとするを、住山の僧年七十六なるが、担きて十町余もある坂路を逃れ下り、災を脱れたりとぞ。

この祖像は、日蓮在世にその弟子日法上人の、目の当り日蓮の容貌を視て刻める肖像なり。因て其長けも人身の如くなるを、かの老僧の持出たるは、日蓮精神の在る所ならん。⁽²⁶⁾

当時既に平戸藩主の座を譲っていた静山⁽²⁶⁾が、この話しをはたして遠い九州長崎で聞き及んだものであるのかは未祥であるが、それにしてもかなり天下の耳目を驚かせたものであったことが知れる。それと同時にこの火災の原因についておもしろからぬ風聞があったのである。この時期頻発する災厄の原因を那辺に求めたらいいか。人事では尽しがたい不運が重なったのであろうか。それとも当時の識者から盛に非難されているような仏教の風儀の頹廢が延山にも及んでいたとみるべきか。

更に同十二年には五重塔から出火し、合計二十八棟の伽藍堂宇を失っている。

そして明治八年一月十日、西谷本種坊から出た火は全山に猛火をふるい、本堂、祖師堂など本院諸堂七十五棟を塵灰となし、なお支院、町家にもその類を及ぼして都合百四十四棟の堂宇を焼失せしめると共に、それまで度々の災厄にもかかわらず大切に格護してきた宗祖御真蹟を全て鳥有に帰してしまい、身延山火災中最大なものとなってしまった。まったくかえすがえすも残念で、申し訳ないことであった。

おわりに

しかしながらこのような災害にもめげず、身延は山中という不便なところにありながら、その度に人を得、淨財を得て再建に立ち上がってきた。そしてやがて現存の諸伽藍を整え、更にこの度の本堂建立へと、着実に復興・発展の歩みを続けているのである。その徳はいづれも宗祖日蓮大聖人に帰されるべきものではあるが、それにしてもそこに尽してきた人々の努力が忘れられてはならない。

今後資料を整え、この問題に付随する造営費等の諸々の問題をも考慮に入れながら、整理していきいたいと思つてい

る。

本稿については北沢光昭氏から御示教を得た。記して、その学恩を謝す。

(この小稿を、常に変らぬ慈眼をもって私の拙い研究活動を見守って下さっている里見先生の古稀の祝いに捧ずる)

〔註〕

- (1) 「秋元御書」 定遺一七三九頁
- (2) 身延町役場発行『身延町の現状とその展望』 一一頁
- (3) 宮崎英修「日蓮聖人晩年の健康をめぐって」(『大崎学報』一〇三号)
- (4) 「庵室修復書」 定遺一四一〇頁
- (5) 同右 一四一一頁
- (6) 同右

(7) 室住一妙『行学院日朝上人』八六頁

(8) 『妙法寺年録』(『甲斐叢書』八卷二七四頁)

(9) 『日海記』(『宗全』二三卷一六〇頁)

(10) 昭和三十四年(一九五九)八月十四日の台風七号によって、廟域の歴代法主墓石は十三基が流出し、常經殿の地下には土砂が流入するなどした。被害は廟域にとどまらず身延金山にわたった。

(11) 『鷲の御山』一〇一頁

(12) このことについては『統身延山史』第一章祖廟整備の進展の項を参照されたい。

(13) 『本化別頭仏祖統紀』巻尾六頁

(14) 藤井教雄編『御本尊鑑 遠沾院日亨上人』所収

(15) 身延山久遠寺身延文庫所蔵

(16) 『兵衛志殿御返事』定遺一六〇六頁

(17) 『曾谷殿御返事』定遺一六六四頁

(18) 宮崎英修 前掲稿

(19) 『日蓮教団全史』上五五頁

(20) 『宗全』二卷三八二頁

(21) 『宗全』一卷四四六頁

(22) 同右 四四九頁

(23) 『日蓮教団全史』上一九四頁。なお同書はこの時の日祐登山の日を康永三年としているが、同元年の誤り。

(24) 同右

(25) 東洋文庫『甲子夜話』四卷一五四頁

(26) 静山は宝曆十年(一七六〇)に生れ、安永四年(一七七五)祖父のあとをうけて藩主となり藩政に尽したが、文化三年(一八〇六)子に封を譲って退隠し、以後説書自適の生活を送った。『甲子夜話』は文政四年(一八二一)十一月甲子の夜にその

見聞の筆録に着手し、正・統二百巻を著わし、後編百巻の予定が八十巻に達したところで天保十二年(一八四一)没した。

身延山諸堂建立考(林)